

平成 26 年度福山大学第 3 回 FD・SD 研修報告

大学教育センター教育開発部門

平成 26 年 9 月 9 日（火）、今年度の第 3 回 FD・SD 研修が、大学会館 3 階 ICT 教室 CLAFT で実施されました。今回のテーマは、「学生と実り多い対話をするために：ロールプレイによる基本的傾聴のトレーニング」というものであり、主に保健管理センターと学生委員会による企画であり、大学教育センター教育開発部門は共催という立場で全学教職員への周知を行いました。

午後 1 時、学生委員会の菊田委員長の挨拶と趣旨説明で始まりしました（写真 1）。菊田委員長からは、学生への対応の基本となる「話を聴く」実践的なテクニックを身につける目的で企画したことが説明されました。そのために、ただ単に講義を聴く形式ではなく、福山大学の教職員が、これまでに学生の話聴く際に困難を感じた場面を想定した架空事例に基づき、どのような対応方法がありえるかについて、ロールプレイをまじえながら小グループで検討し、学生対応の幅を広げる研修会であるとの趣旨説明が行われました。



写真 1 菊田学生委員長の挨拶と趣旨説明

研修は保健管理センター学生相談室の藤居尚子先生（臨床心理士）の指導の下、約 2 時間にわたり実施されました。まず、藤居先生による基本的傾聴テクニックと傾聴スキルの必要性に関する講義から始まりました（写真 2）。参加者には、藤居先生から事前に「基本的傾聴テクニック」というレジュメが配付されていて、①かかわり行動：“あなたの話に関心をもっていますよ”と伝える態度、②開かれた質問・閉ざされた質問、③はげまし・いいかえ・要約、④感情の反映（「共感」につながる）を練

習するように宿題も出ていました。そのお陰で、傾聴スキルが、「語り手の話を促進すること」「”あなたの話に興味がありますよ”という気持ちを伝える手段であること」「この2つの相乗作用によって話の広がりや深まりが出ること」を把握することができました。これによって傾聴による関係づくりの大切さが理解できました。さらに講師より、教職員が学生対応を行う上で傾聴は必要であるが、それだけで充分という訳ではないことも説明がありました。



写真2 藤居尚子先生による「傾聴」に関する講義

次に、その傾聴スキルの必要性を実感するために、3名の小グループに分かれて、ロールプレイによる基本的傾聴のトレーニング及び学生対応の事例検討を行いました（写真3）。ここでも「基本的傾聴テクニック」の資料を参考に、「出身地自慢」「私の好きな有名人」「思い出に残る旅先での出来事（風景・食事・出会った人・・・）」「私の愛用品」「今、注目している研究分野」から1つ選択し、それについて2分間の会話ができるよう事前に課題が示されていました。その選択した内容を順番に話すわけですが、聴き手は「基本的傾聴テクニック」に準じた聴き方と反した聴き方を行いました。この両者を体験することで、「基本的傾聴テクニック」に準じた態度である、身体を正面に向け、視線を合わせ、うなずいたりあいづちを打ったりして聴いてもらうと話しやすく、いろいろな話題へ展開することが実感できました。逆に、「基本的傾聴テクニック」に反した態度で聴かれると、なかなか次の言葉も見つからず、話の広がりや深まりにつながらないことを体感できました。

「基本的傾聴テクニック」のロールプレイ後、各グループは用意された架空事例3つのどれかに割り振られ、3名が「学生役」「相談を受ける役」「両者を観察する役」を交互に担当して、実際の事例に対するロールプレイを行いました。架空事例は、「死にたいと言われた時の対応」「他の教職員の言動について学生から相談された時の対応」「心の病気が疑われる時の対応」という、実際に相談を受けた際には、非常に慎重な対応を迫られる内容でした。



写真3 小グループに分かれてのロールプレイと架空事例の検討

3名での架空事例検討が終了した後、同じ架空事例を検討した小グループが集まったのディスカッションが行われました（写真4）。ここでは司会進行役と書記（ホワイトボードへ各グループの意見を筆記）が決められ、各グループから検討した架空事例に対し、「学生の状況を詳しく知りたい時、どのようなことに留意して尋ねるのか」「学生相談室の利用を促したい時に、どのような伝え方の工夫が考えられるのか」を中心にディスカッションを行いました。



写真4 小グループが集まったのディスカッション

小グループが集まったのディスカッションの後、藤居先生からのアドバイスが行わ

れました（写真 5）。「死にたいと言われた時の対応」「他の教職員の言動について学生から相談された時の対応」「心の病気が疑われる時の対応」という深刻な相談を受けるという架空事例に戸惑っていた参加者も、臨床心理士として学生相談に当たっておられる経験に基づく具体的なアドバイスは、学生との接し方に大いに参考となりました。たとえば、まずは傾聴により信頼関係を築き、問い詰めるのではなく心配だから教えて欲しいという態度で尋ねること、学生が孤独にならないようにつながりを持つとともに、その糸を他の人との間でも増やしていったセーフティネットを編み上げる感じで対応することなどのアドバイスがありました。そして、学生相談室の利用を勧める際に、相談に行くことに積極的でなければ、まず行きたくない気持ちを傾聴し、共感した上で本人のハードルとなっているものを取り除けるように働きかける方法も有効であるとのアドバイスもありました。後日、藤居先生から、各グループのディスカッションの内容とそれに対するコメントが、PDF ファイルで参加者全員に配布され、振り返りとして貴重な資料となりました。



写真 5 グループ別ディスカッションに対する藤居先生からのアドバイス

終了後、参加者には報告書が課せられたが、27名の教職員が研修の概要、感想、講師へのコメント、FD・SD研修への意見等を提出しました。研修内容の感想としては、ロールプレイを取り入れたことで、「基本的傾聴テクニック」の重要性が体感できたと多く書かれていました。また、これからは今回の架空事例のような相談や学生生活・学業・就活で不安定になる学生も増加する可能性もあるため、とても有意義な研修であったという感想が多く見られました。そして、同じ様な研修をすべての教職員が受けるべきであるとか、さらに応用編を行い継続研修にするべきだといった提案も見られました。その一方で、非常に深刻な架空事例であったため、ディスカッションで慎重な発言が多く、中には深刻すぎて責任が持てないと発言を回避する例もあり、学生相談の難しさの一面を再確認できる記述も見られました。

福山大学は5学部14学科の総合大学として、大学キャンパスには多様な学生が生活をしています。親元を離れ初めての下宿生活をする学生、新たな友人関係を構築しようとする学生、自分の将来を真剣に考える学生、学業だけでなく部活やボランティアにも挑戦する学生、本当にさまざまです。その若く活気ある学生達が、悩んだり、進む方向がわからなくなったり、孤独感を感じたりした時、そっと寄り添うことができる教職員であること、何よりも、学生が相談しやすい環境づくりと関係づくりをいつも考えていく必要があることを再認識できた研修だったと思います。今後も学生対応に関しては、学生委員会と保健管理センターと共同して、FD・SD研修を企画していきたいと思います。

(記：平 伸二)